「家族だから、辛いこともある」

たけこ　（30 代）

家族だから、辛いこともある。

私は、高校 3 年生までひいじいちゃんと同居していた。ひいじいちゃんは晩年認知症を患った。当時は今ほど介護保険サービスが充実していなかったこともあり、要介護状態のひいじいちゃんを、私の両親や祖父母が自宅で介護していた。

私の思春期は、変わりゆくひいじいちゃんとともにあった。新しい出来事を覚えられなくなり、やがて家族の顔も分からなくなってしまった。食事をしたことを忘れてしまい、家中の食べ物を漁る日もあった。突然戦時中に気持ちが戻ってしまい、敵から逃れるために近くの土手まで全力疾走していることもあった。ひいじいちゃんは戦時中、衛生兵だったようだ。

思春期の私は、そんなひいじいちゃんにも介護に疲れ切った家族にも、どんな気持ちで向き合えばいいのかがわからなかった。デイサービスやショートステイでひいじいちゃんがいない日には、心底ホッとしている自分がいた。ひいじいちゃんに対して、「早くいなくなってしまえばいい」と思ってしまうこともあった。そのたびに、そんなことを思ってはいけないと自責した。

大人になって、私は看護師になった。病棟で認知症患者さんに接する機会は多かった。環境変化から自分の居場所がわからなくて混乱してしまう患者さんや、治療を拒否する患者さんに、これまでたくさん対応してきた。

看護師の私は、患者さんにわかるように何度でも同じ説明をした。居場所がわからなければ、病棟内を患者さんと一緒に歩いて案内した。

それでも、患者さんに対して「早くいなくなってしまえばいい」と思うことはなかった。それは、私が看護師だからというだけではなく、私にとって患者さんは「家族」ではないからだ。その相手がもし自分の家族だったら、私はきっと冷静ではいられない。

家族には、その人とともに生きてきた時間がある。だからこそ、変わっていってしまう姿を「病気だから」と割り切って向き合うことは容易ではない。心無い感情を抱くたびに、「こんなふうに思ってはいけない」と苦しむのも、大切な家族だからである。看護師として患者さんや病気を理解することと、一人の家族と向き合うことは、まったく別のことだ。家族だから辛いのだ。

もしも今、あなたが家族に対する心持ちで悩んでいることがあるのであれば、家族だから辛いこともあるということを知ってほしい。あなたの感情に蓋をする必要もないし、自責をする必要もない。その気持ちは、家族だから、大切だから。ただそれだけ。